

南アルプス市

# ふるさと人物室

穴水 朝次郎  
 石橋 湛山  
 ウォルター・ウェストン  
 小野 徹  
 小野 要三郎  
 河西 豊太郎  
 川崎 小虎  
 北村 雄治  
 切刀 亀内  
 内藤 多仲  
 名取 春仙  
 植原 正直  
 廣瀬 元恭  
 福田 甲子雄  
 矢崎 きみよ  
 矢崎 源九郎  
 若尾 逸平



南アルプス市ゆかりの人物

## 再発見

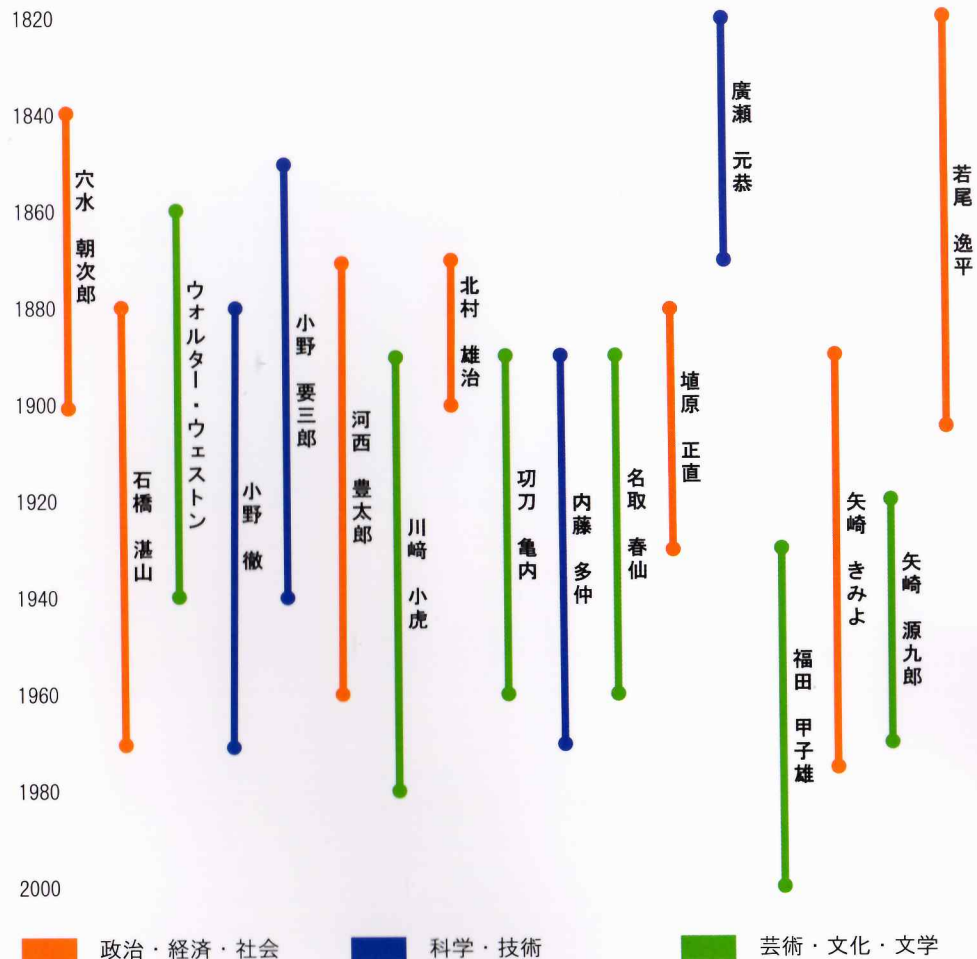


Chen, Hotta, Shiranotogen, Wakakusa, Kozai, Ashiyasu

南アルプス市は、その名の示すとおり南アルプス山系の麓に位置し、緑豊かな自然に囲まれた地です。さくらんぼや桃などの果樹栽培が盛んで、自然の恵みを存分に感じられる場所ですが、過去には河川の氾濫による水害や干ばつなど、自然の脅威にさらされることもありました。

一方、明治維新に始まり太平洋戦争に終わったとされる日本の近代は、西洋の文化を取り入れつつ、新たな社会の仕組みが作られた激動の時代でした。この時代、南アルプス市を舞台に活躍した人や南アルプス市から全国各地、さらには海外へと活躍の場を広げた人など、後世に残る偉業を為し遂げた人々が多く存在しました。

南アルプス市ふるさと人物室において、近代前後に活躍した南アルプス市ゆかりの人々を紹介することで、皆様にごふるさとの魅力を再発見していただければと考えております。



御勅使川の治水に尽力した政治家

あなみずともじろう  
穴水 朝次郎

1836天保7年 - 1900明治33年

甲斐国巨摩郡下高砂村（南アルプス市）出身  
政治家



幼い頃から学問を好んだ先見性と行動力のある人物で、明治6（1873）年に山梨県区長総代となる。明治9（1876）年、山梨県庁に出仕。治山治水・農業・商工業の振興発展に尽くし、多大な功績を残した。明治24（1891）年、山梨県会議員となり、国及び県に建議し、明治32（1899）年に御勅使川分流の封鎖堤（石縦堤）を完成させた。これにより前御勅使川は廃河川となり、白根・八田地域の水害は激減し信玄堤決壊という惨事もなくなった。その後、廃河川に道路が作られ、昭和7（1932）年にコンクリート永久橋の信玄橋が完成し、廃河川道路沿いは地域隆盛の基礎地盤となった。

長遠寺で中学時代を過ごした総理大臣

いしばし たんざん  
石橋 湛山

1884明治17年 - 1973昭和48年

東京府麻布区（東京都港区）出身  
ジャーナリスト・政治家



父は身延山久遠寺81世法主となった杉田湛誓（日布）。湛山は母方の石橋姓を継いだ。幼少期を鏡中榮村（南アルプス市）にある長遠寺住職の望月日謙の下で過ごし、山梨県立尋常中学校（現甲府一高）から早稲田大学文学部文学科哲学科へ進学した。明治44（1911）年、東洋経済新報社に入社し、独学で経済学を研究し政治・経済論を執筆。同社の主幹、代表取締役を歴任した。日米開戦後は、当局からの圧力を受けながら早期終戦を主張した気骨の言論人。昭和22（1947）年、静岡2区から衆院議員に当選。通算6期。昭和31（1956）年12月に第2代自由民主党総裁となり石橋内閣を組織したが、病のため在職2か月で辞任した。

アルプスに登った「近代登山の父」

# ウォルター ウェストン Walter Weston

1861文久元年 - 1940昭和15年

キリス出身  
師・登山家



公益社団法人日本山岳会所蔵

明治21（1888）年から大正4（1915）年までの間に3度来日し、通算約12年間日本に滞在した。明治35（1902）年、登山の案内を請うため訪れたウェストンの紳士的な態度に感銘を受けた当時の芦安村長は、外国人の登山に反対する村民を説得し、北岳登頂をサポートした。明治37（1904）年には鳳凰三山の地蔵岩塔（オベリスク）に初登攀。日本アルプスを南・北に区分して命名した。明治43（1910）年、日本山岳会最初の名誉会員に推される。平成元（1989）年に南アルプス開拓の功績を称え、芦安地区の広河原にレリーフが作られた。毎年6月の最終週末に、この場所で南アルプス開山祭の儀式が執り行われている。

## 地方病撲滅に尽くした医師

# おの の 徹 小野 徹

1875明治8年 - 1971昭和46年

山梨県巨摩郡鏡中条村（南アルプス市）出身  
師



明治26（1893）年、東京慈恵医院医学校を卒業。明治32（1899）年に鏡中条村で医院を開業する傍ら、当時蔓延していた日本住血吸虫病（地方病）の臨床医療と原因究明に努めた。また、山梨県の地方病対策の中心的役割を担い、県関係機関への協力やはたらきかけにより、県の地方病撲滅事業は重点施策として推進されるに至った。さらに、日本住血吸虫の中間宿主である宮入貝の駆除のため、政府・国会を動かし寄生虫予防法の改正を図り、用水路のコンクリート化などの施策を促進した。県の保健衛生や学校保健などの向上にも貢献し、山梨県医師会会長、山梨地方病撲滅協力会初代会長などの要職を歴任した。昭和24（1949）年、鏡中条村長に当選し、昭和41（1966）年に若草町名誉町民となった。

果樹栽培の先駆者

# おの の よう ざ ぶ ろ う 小野 要三郎

1854安政元年 - 1941昭和16年

甲斐国巨摩郡西野村（南アルプス市）出身  
農業家



少年時代、西野手習所「松聲堂」に学ぶ。明治24（1891）年、西野村ほか2か村組合議員に当選。明治26（1893）年にスモモやナシの試作を始め、モモ・ブドウなど手を広げるが、虫や病気で全滅し失敗に終わる。しかし試作の果物が売れたことや、いずれは中央線が甲府まで開通するという若尾逸平の話から、果樹栽培に将来性を感じ栽培を続ける。明治40（1907）年には新たに土地を開墾し、本格的にモモ・サクランボ・ブドウの栽培を始めた。熱心な研究と努力により、西野を中心とした一帯で果樹栽培が広まっていき、南アルプス市の果樹栽培発展の基礎となった。

## 甲州財閥を支えた文化人実業家

# か さ い と よ た ろ う 河西 豊太郎

1874明治7年 - 1959昭和34年

山梨県巨摩郡十日市場村（南アルプス市）出身  
実業家・政治家



豪農の家に生まれ、南八代村（笛吹市）の加賀美平八郎が経営する私塾・成器舎に入塾。北村雄治の北海道開拓計画に参画するが、家族の反対に遭い断念。大正6（1917）年、選挙参謀を務めた根津嘉一郎の地盤を引継ぎ衆院議員となる。その後、実業家として活躍し、国民新聞社副社長、東京電燈株式会社（現東京電力）取締役などを歴任。美術文化の振興にも尽くし、根津美術館設立の中心となり、理事長、館長を務めた。また、自身も嘯月・三江の号をもって漢詩・絵・書に親しんだ。言語学者の矢崎源九郎は孫にあたる。

日に疎開した日本画家

# 川崎 小虎

1886明治19年 - 1977昭和52年

山梨県岐阜市出身  
日本画家



本名は隆一。9歳で上京し祖父の千虎ちとらに大和絵を学び、明治43（1910）年に東京美術学校日本画科を卒業した。文展・帝展・日展と官展を中心に、伝統を生かしながら近代の思考や感覚を盛り込んだ作品を発表した。昭和19（1944）年、小虎作品の愛好家に落合村（南アルプス市）を紹介され、一家で疎開。スケッチ帳を片手に野山を歩き、終戦後の昭和23（1948）年まで滞在。生涯で最も自由で楽しい時代を過ごした。山梨ゆかりの画家として、山梨県立美術館・南アルプス市立美術館で展覧会が開催されたこともある。同じ日本画家の東山魁夷ひがしやまけいは娘婿。小虎とともに落合村で一時期を過ごし、この地で母を看取った。

北海道開拓に尽力した農場主

# 北村 雄治

1871明治4年 - 1903明治36年

山梨県巨摩郡鎮中条村（南アルプス市）出身  
拓家・実業家



酒造り酒屋の家に生まれ、父が早世したため17歳の若さで家業を継いだ。2年経って原因不明の火災に遭い家業は大きな打撃を受けた。やがて、北海道開拓こそ日本の将来の発展につながる重要な事業であると考えようになり、岩見沢村（岩見沢市）に大農場を開く。山梨県内外から移住者を募り、明治27（1894）年に移民の第一陣が入植するが、直後に体を壊して、明治36（1903）年に32歳の若さで亡くなった。鏡中条村で行なわれた埋骨式では、当時、長遠寺住職だった望月日謙もちづきにっけんや河西豊太郎かさいとよたろうが弔辞を寄せた。北村農場は、明治33（1900）年に岩見沢村から分村独立、雄治の姓にちなんで北村（岩見沢市）と命名され、雄治の没後とも志を引き継いだ弟の龜、謹らにより大きな発展を遂げた。

地域史料「甲州文庫」の蒐集者

# 内 藤 亀 内

1889明治22年 - 1957昭和32年

山梨県中巨摩郡豊村（南アルプス市）出身  
郷土史家



山梨県立博物館所蔵

系いとまのしやう繭商を営むかたわら、若尾逸平わかおいつべいを祖とする若尾財閥の出資により発足した「山梨県志編纂会」の史料調査・蒐集に刺激され、山梨の郷土史料蒐集を始める。大正11（1922）年に生糸の大暴落を機に上京。昭和2（1927）年、それまで集めた史料文献を正式に「甲州文庫」と命名した。昭和18（1943）年には、空襲を避けるため「甲州文庫」の一部である約1万冊を東京から豊村へ移管した。昭和26（1951）年、2万3千点を超える貴重な史料が揃い注目されていた「甲州文庫」は本人の希望により山梨県立図書館に譲渡された。その後、平成17（2005）年に山梨県立博物館に移管された。

東京タワーを設計した建築博士

# 内 藤 多 伸

1886明治19年 - 1970昭和45年

山梨県中巨摩郡榑村（南アルプス市）出身  
建築構造学者



明治43（1910）年、東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し、同大学大学院に進学。同年、早稲田大学講師に就任し、大正元（1912）年に教授となる。大正13（1924）年、アメリカ留学時のトランク破損を基に見出した「かこうけんちくたいしん耐震構造」で工学博士となる。この理論により設計された歌舞伎座は、関東大震災でも被害を受けなかった。日本建築学会会長を始め様々な要職を歴任し、昭和32（1957）年に早稲田大学を退職するまで後進の育成に尽くした。その後、昭和33（1958）年開業の東京タワーを設計し、「耐震構造の父」「塔博士」と呼ばれた。山梨県内でも県庁舎本館など多くの建物の設計を手がけた。

# 名取 春仙

1886明治19年 - 1960昭和35年

山梨県中巨摩郡明穂村（南アルプス市）出身  
世絵画家



本名は芳之助。父は綿問屋「両国屋」を営み、若尾逸平らと第十国立銀行（現山梨中央銀行）の創設にかかわるが、事業の失敗により一家で上京。11歳で日本画を習い始め、20歳で日本美術院展に入選。明治42（1909）年、東京朝日新聞社に入社し、夏目漱石を始めとする有名作家の挿絵を手がけ名を広めた。退社後、浮世絵師の渡邊庄三郎に見出され、役者絵師としての地位を築く。故郷の明穂村で画会を開き、久成寺に絵馬を奉納したこともある。昭和12（1937）年には、山梨美術協会の発足に参加。平成3（1991）年、春仙の画業を広く紹介するため、地元の榎形町に春仙美術館（現南アルプス市立美術館）が開館した。

## 日移民法案阻止に努めた外交官

# 埴原 正直

1876明治9年 - 1934昭和9年

山梨県巨摩郡源村（南アルプス市）出身  
外交官



明治30（1897）年、東京専門学校（現早稲田大学）英語政治科を卒業。翌年、外交官試験に合格し外務書記官、総領事などを経て、大正7（1918）年に通商局長から政務局長、翌年に外務次官となる。大正9（1920）年、シベリアで飢餓に苦しむポーランド人孤児の救済に奔走。大正11（1922）年、駐米特命全権大使となり排日移民法案の阻止に努めるが、大正13（1924）年に法案が可決されると、アメリカ政府に宛てた書簡がその一因とされ事情報告のために帰国し退任。以後、亡くなるまで日米関係の改善に尽くした。現在の研究では、書簡が歪曲され政治的に利用されたという解釈もある。洋画家の埴原久和代は妹にあたる。

# 廣瀬 元恭

1821文政4年 - 1870明治3年

山梨県中巨摩郡藤田村（南アルプス市）出身  
医師



山梨県立博物館所蔵

実名は龔で元恭は通称。祖父・父ともに儒医の医家に生まれた。西花輪村（中央市）の時習館で、後に西野手習所「松馨堂」初代教授となる松井煥斎に学ぶ。15歳で江戸に出て、蘭学者坪井誠軒の塾に入門すると頭角を現し塾頭となり、先輩である緒方洪庵と並び称された。弘化元（1844）年、京都に蘭学塾「時習堂」と蘭方医院を開業。塾の門人には、後に外務大臣となる陸奥宗光の名もある。嘉永2（1849）年、日本に牛の痘苗が輸入された半年後には、天然痘の種痘の書『新訂牛痘奇法』を著した。翌年、藤田村で医師の兄に牛痘癩を送り、山梨における種痘の普及にも務めた。

## 郷里の風土を生きた俳人

# 福田 甲子雄

1927昭和2年 - 2005平成17年

山梨県中巨摩郡飯野村（南アルプス市）出身  
俳人



昭和20（1945）年に山梨県立農林学校を卒業し、就職先の満州で召集され翌年帰還。昭和22（1947）年、職場の上司で俳人の飯野燦雨に勧められ「雲母巨摩野支社」へ入会し、飯田蛇笏・龍太に師事する。昭和38（1963）年から「雲母」編集同人となり同紙が900号で終刊するまでかかわった。平成5（1993）年「白露」創刊。甲州の自然・人間に対して鋭く、かつ温かなまなざしを注ぎ、濃厚な風土性・泥臭さを真骨頂とし、暮らしや風土がしみ込んだ季語をいとおしむ作風を貫いた。各地で俳句講座を開くことで俳句愛好者を開拓し、山梨県内の俳句人口を増やした。平成16（2004）年、俳壇最高賞の蛇笏賞を受賞。

「の健康を守った「愛育の母」

# 矢崎 きみよ

1891明治24年 - 1979昭和54年

山梨県中巨摩郡鏡中条村（南アルプス市）出身  
子衛生功労者



昭和12（1937）年、源村が乳幼児死亡率の低下を目標に「愛育村」指定を受  
け、源村愛育会を発足。初代班長に就任し、32年間に渡り源村愛育会の発展に尽  
力した。その功労を称えられ、昭和44（1969）年には最も名誉のある恩賜財団  
母子愛育会総裁表彰を受けた。全国で同時期に「愛育村」指定を受けた村の中  
で、戦後も愛育活動が盛んだったのは源村（白根町）のみだった。小さな農村の  
地域ぐるみの活動が全国各地の模範となり、現在も国内外から視察や研修を受け  
入れている。昭和60（1985）年には当時の皇太子・皇太子妃、平成26（20  
14）年には秋篠宮妃紀子さまが視察された。

アンデルセンを翻訳した言語学者

# 矢崎 源九郎

1921大正10年 - 1967昭和42年

山梨県中巨摩郡三恵村（南アルプス市）出身  
言語学者・翻訳家



十日市場で矢崎銀行を経営する家に生まれる。東京帝国大学文学部言語学科を卒  
業後、若くして東京教育大学（現筑波大学）の助教授に就任。専門のビルマ語を  
始め、英語・ドイツ語・イタリア語・北欧の各言語など多くの言語に精通し、言  
語学関係の著書を数多く残した。また、戦後を生きる子どもたちの心身共に豊か  
な成長を願い、その糧となるよう童話の翻訳にも努めた。特にアンデルセン童話  
の翻訳に力を注ぎ、戦後を代表するアンデルセンの翻訳者となった。生まれつき  
胃腸が弱かったために45歳の若さで亡くなったが、100冊を超える訳書、著書  
を残した。実業家の河西豊太郎は祖父に、俳優の矢崎滋は息子にあたる。

「甲州財閥」のトップランナー

# 若尾 逸平

1820文政3年 - 1913大正2年

甲斐国巨摩郡在家塚村（南アルプス市）出身  
実業家・政治家



山梨中銀金融資料館所蔵

武士を志し江戸に出たが挫折し、葉煙草を中心に行商生活を営む。横浜開港時に  
生糸・水晶などを売り巨利を得たことから、蚕糸業に力を入れ甲州糸の評価を高  
めた。明治10（1877）年、第十国立銀行（現山梨中央銀行）設立の最高出資者  
となる。明治22（1889）年に初代甲府市長、翌年には県内初の貴族院議員に当  
選。「株式は“あかり”と“乗りもの”に限る」と、当時の成長産業への投資を  
おこなった。山梨県出身の実業家たちが東京電燈株式会社（現東京電力）を勢力  
下に置いた頃から、財界で「甲州財閥」として認知され始め、その巨頭と仰がれ  
た。明治32（1899）年、行商時代からの宿願だった開国橋の架橋を果たした。

## 南アルプス市 ふるさと人物室

### — 南アルプス市ゆかりの人物 再発見 —

編集・発行者 南アルプス市立図書館

発行日	2017/03/01	第1版	2021/03/01	第5版
	2017/05/15	第2版	2022/03/01	第6版
	2019/03/01	第3版	2023/03/01	第7版
	2020/03/01	第4版		

山梨県南アルプス市小笠原1060-1

電話：055-280-3300 F A X：055-284-7101